

東日本大震災の被災地における人々のリスク認知

～10年の年月を経て～

氏名 山崎駿亮

2011年に発生した東日本大震災によって被災した人々は、その恐ろしさを今でも忘れず、津波が引き起こすリスクをしっかりと認識しているのだろうか。本研究で用いるリスク認知とは、人々がリスクを主観的にどのように捉えているかを意味するものとする。また、震災を経験した事が、正常性バイアスの程度にどれほど影響を与えているのだろうか。本研究で用いる正常性バイアスとは、ある範囲までの異常は異常だと感じずに、正常の範囲内のものとして処理する心のメカニズムの事とする。先行研究では、地震・津波に対するリスク認知の程度が、被災者とそうでない人との間にどれほど差があるかという点は明らかにされていない。そこで本研究では、震災の経験がどの程度、リスク認知や正常性バイアスの程度に影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。本研究で盛岡市と釜石市の住民に質問紙調査を行ったところ、釜石市の住民の方が、将来的に地震・津波が発生し、それらが岩手県に被害をもたらす可能性が高いと思っている人が多かった。この事から、実際に東日本大震災を経験した人が多い釜石市の住民の方が地震・津波に対する危険性をしっかりと認識しており、リスク認知が高いことが分かった。この結果から、震災の経験が地震・津波に対するリスク認知の程度に影響を与えていることが明らかになった。なお、正常性バイアスの程度に関しては、両市において大きな差は見られなかった。